



半沢 卓也 (3年)
Takuya Hanzawa

チャンスはいかに活かしかれるか
後輩たちにはより上位を目指してほしいです

天草戦の前評判は五分五分と言われていた中、予想していた通りの戦いになりました。チャンスをつかめなかった方が負け、チャンスはいかに活かしかれるかが大事でした。そんな中、自分としては弱いところが見えてしまったと思います。相手にうまくやられてしまいました。チャンスがまわってくるぞと監督にも言われていた通り、最終回(7回1死2、3塁のチャンスで打順が回ってきました。ただ、バッ

ターボックスに入るとあせってしまっ、投手の得意球であるライズボールに手を出してしまいました。いづもならでることができなかったことが、本当に悔しいです。(天草より白石工のピッチャー)真希斗の方が上でした。同じ3年生は今までやってきた仲間。みんなと一緒に戦えないことはとても残念です。その分、後輩たちにはインターハイで上位を目指して頑張ってもらいたいと思います。

天草との試合から15日後の8月17日、本市出身の主 軸2人に現在の心境と仲間への思いを語ってもらった



我妻 光平 (3年)
Kohei Agatsuma

このチームだからここまで来ることができた
後輩たちには一球一球を大事にしてほしい

今思うと、「自分ももっと打ってあげたい」というような悔しい思いがあります。チャンスはありました。ただ、そのチャンスをもものにできなかったことが自分たちの弱いところ。ピッチャーがあんなに頑張ってくれていたのに、何とかして点数を取ってやりたかったです。それが本当に心残りです。昨年からキャプテンとなり、大変なこともありましたが、キャプテンの証である10番を背負ってきて、いろいろ

ると今まで経験したことのない経験をすることができました。同じ3年生とは入学してから3年間、ずっと一緒にやってきて、楽しかった思い出がいっぱいあります。このチームだからこそ、ここまで来ることができたのだと思います。後輩たちは、この経験を活かして、この先一球一球を大事に、一つ一つの試合を大事にしてほしい。そして、勝てるようなチームになってほしいです。

終わりは始まり

1987(昭和62)年創部の白石工ソフトボール部。愛好会時代を含め約30年、監督を務めてきた佐藤真起男先生は、今年のチームを「平成11年のベスト8に近い、それ以上にいける期待があった」と話した。

キャプテンの我妻を中心にまとまりがあり、エースの三浦とピッチャーの丸山など、今年の主力3年生8人は昨年の全国大会を経験。選手たちにとって「全国制覇」という目標も、現実味のある言葉となっていた。それでも負けてしまった。僅差とはいえ、勝者と敗者に分かれるのが勝負の鉄則。勝者は残り、敗者は去るのみである。

白石工に勝った天草は3回戦以降も勝ち進み、3位という成績を取った。勝負に「もしも」はないが、白石工が全国の強豪と互角に渡り合える実力を持っていたことは伺える。

そして、敗れたから何も残らないというわけではない。ここまでできた頑張りは、選手たちが一番分かっている。「個」の力はもちろん、「チーム」としての力を成長させるために、ときには仲間ともぶつかりあった。ここで培った力は、必ず次に活かされるはずだ。3年生は、

就職や進学といった次のステージへ歩み出す。1、2年生は先輩の意志を継ぎ、さらなる活躍を目指す。

佐藤監督は、「部活を通じて普段の生活態度を学んでほしい。それがプレーにも出る」と語る。野球よりも人間が狭いソフトボール。その分、瞬時の判断が要求され、小さなミスが命取りにもなる。「人」としての基本を育てることが試合での集中力を生み、チームプレーにつながっていく。

試合直後、キャプテンの我妻は、「このチームは本当にいいチーム。まとめるのに苦労したし、つらいときばかりだったが、みんなとやれて本当に良かった」と涙をこらえながら話した。「ソフトボール」という競技を通じて、彼らは「人」として一回りも二回りも成長した。彼らの人生は終わってはいない。むしろこれからが始まりである。この経験を活かして、全国へとつなぐモチベーションをさらなる高みへ伸ばすことができたなら、素晴らしい未来が待っているに違いない。白石工ソフトボール部の戦いは、白石・宮城に勇気と感動を与えてくれた。彼らは、「最強」を目指すため、先輩たちの意志を受け継ぎ歩んでいく。



戦いに敗れ、それぞれの道を歩き始める3年生
その意志を受け継ぐ1、2年生
彼らはまさに「白石の誇り」
これまでも、そして、これからも――

震災にも負けず、選手たちは本当に頑張ってくれました

昨年の全国大会を経験した選手が多く残り、今年はベスト8、願わくば優勝したいと、選手たちと一緒にやってきました。県大会も力を十分に発揮し、全国でも上位をねらえるチームに育ってくれたと思います。1年生のときから寝食を共にしてきた3年生には、「ご苦労様でした。ありがとうございます」と言いたいです。震災のせいにしてしまえば簡単ですが、選手たちは練習できなかった期間を補うように練習しましたし、「プレーできるチャンスももらったんだ」という思いでやってきました。選手は本当に頑張ってくれたと思います。残った後輩たちは、この経験を活かしてこの先につなげてほしいと思います。



かね こ 金子 諄(2年)

もっと強く、そして、先輩の分まで戦いたい

先輩たちは普段は面白くて試合では頼りになって、一緒にできてとても楽しかったし、もっと一緒にプレーしたかったです。来年、もう一度インターハイに出て勝てるように、練習をしつかりやりたいと思います。

先輩たちは最後まであきらめずに全力プレーで戦っていましたが、自分たちに足りないものが分かり、もっと強くなって、先輩たちの分まで戦いたいと思います。



さとう まきお 佐藤真起男 監督



かじかわ たくや 梶川 拓也(2年)

この悔しさを、先輩の意志を胸に刻み、次につなげて行ってほしい。そして、来年こそ、想いを叶えてみせる――